

# Spot

第76回

今回の会員SPOTは、阿倍野区で「ハルカス川崎クリニック」を開業されている川崎寛先生を訪ねました。先生には、下肢静脈瘤の手術を専門に開業されたきっかけや患者の特徴、診療を通して思うことなどをお話いただきました。インタビュアーは編集部です。



阿倍野区

## 川崎 寛 先生

—先生の経歴と開業に至った経緯を教えてください—

関西医科大学卒業後、大学で研修医として働き、研究生活を送りました。シンガポールの国立大学病院へ臨床留学し、心臓血管外科として研鑽を積みました。帰国後は近畿大学病院で講師として5年勤め、岸和田市民病院に勤務し、開業しました。

近大病院に勤めていた頃は主に心臓血管外科として、開心術や大動脈瘤などの大手術に従事していました。心臓手術は主治医の負担が大きいです。同時に大きなやりがいも感じていました。出向した岸和田市民病院では、心臓手術も多々行いましたが、大学病院で診察機会のない、中小の動脈や静脈の疾患を診察機会が増えました。その中で、下肢静脈瘤に悩む患者が非常に多いことを知り、下肢静脈瘤レーザー手術があれば多くの静脈瘤患者の治療に貢献できると思いました。

レーザー手術で下肢静脈瘤治療を始めたきっかけをお聞かせ下さい。下肢静脈瘤の手術を専門にしようと思ったのは、下肢静脈瘤に悩む患者が非常に多く、何よりも2011年からはこのレーザー手術が保険適用されたことで、最新の手術を行ってくれる人が安価で受けられるようになったからです。従来の静脈瘤の手術はストリッピング手術が一般的で、腰麻酔や全身

# “歩くこと”で社会と繋がる

## 下肢静脈瘤のレーザー手術で貢献

麻酔下で施行され、ほぼ入院が必要で、著明な疼痛や腫脹などの合併症リスクが一定の確率で付随します。それに比べ、レーザー手術は局所麻酔で行い、手術後30分の経過観察を歩いて帰ります。術後の合併症のリスクも低く、実際に治療を受けた患者の満足度は非常に高いです。これには外科医として大きなやりがいを感じます。

—手術室に求められる患者の特徴をお聞かせ下さい—

下肢静脈瘤になるのに年齢や性別は関係ありません。中学生でも遺伝でなる人もいます。当院では18、91歳に手術を行いました。年齢よりも職種が原因となっています。同場所ですと同じ体勢の職種の方は下肢静脈瘤になり易いです。例えばコンパニオンや理美容師さんなどは長時間立ちっぱなし、設計士さんや事務職の方は座りっぱなしなので下肢静脈瘤になる方が非常に多いです。

—下肢静脈瘤は、初期段階で気づくことが出来るのでしょうか—

下肢静脈瘤によって命奪われるケースは非常に稀ですが、腫に悪化していきます。痛みもほとんど進行スピードもゆっくりであるため、治療を後回しにする人が多いように感じます。脚の静脈には多くの弁があり血液の逆流を防ぎます。この弁が壊れると血が起り、脚の血液循環が悪くなり、むくみ、症状が出します。初期段階で下肢静脈瘤は外見や症状は多種多様です。症状が進行しているのに見た目には目立たない人もいます。逆に見た目がポコポコなのに症状はあまり進行していない場合もあります。CTなどでは形態しか分から

ず、CTで逆流の程度や不弁率を確認して診察しています。

下肢静脈瘤によって脚がむくむ、歩くのが重くなる、外に出るのが億劫になり、社会と分断され社会性が失われていきます。孤独化すると、高齢者の方は病状になる可能性が高くなります。下肢静脈瘤の手術を受けて脚が治り、歩けることで社会繋がりが出来、認知予防に繋がるかもしれません。

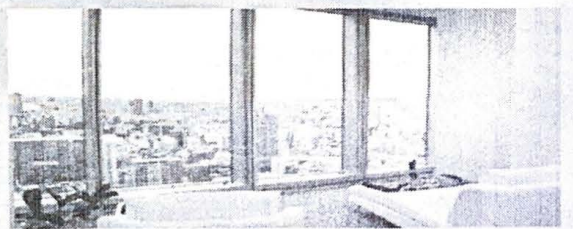
日本では患者のみならず開業医の先生方にも、最近の下肢静脈瘤に対する理解があまり広がっていないように感じられます。歩くと人間の基本です。私は出来るだけ多くの患者を治療し、元気な状態の長生きの手助けをしたいと考えています。

—医療勢について意見を聞かれますか—

高齢化に伴って日本では医療費負担は上がる方です。日本の持つ素晴らし国民皆保険制度を維持するために、保険料を国民皆で負担することは仕方ないですが、重症化する前の初期段階での治療、いわゆる予防医学をもっと推進させることが、医療費を抑えることにつながるのではないのでしょうか。

下肢静脈瘤の治療もそうです。重症化する前の治療が必要です。そのためには、下肢静脈瘤の認知度をあげ、理解を深めることが大切だと思います。

—本日はありがとうございました—



あべのハルカス 21階に位置する「ハルカス川崎クリニック」では大阪の街が一望でき、術後の患者が休憩するホテルのラウンジのような空間がある